# 王維詩「惆悵」考

## ―輞川荘における理想と現實―

陣内孝文

盛唐の詩人王維に、晩春の夕暮れ、別荘である輞川荘に戻る道中の景物を詠じた作品がある。この詩は王維がしばしの休暇を得て、安息の場である輞川荘に歸り着くまでを詠じており、そこはかとない憂愁を漂わせている。

歸輞川作　　輞川に歸りての作

谷口疎鐘動　　谷口　疎鐘動き
漁樵稍欲稀　　漁樵　稍く稀ならんと欲す
悠然遠山暮　　悠然たり　遠山の暮
獨向白雲歸　　獨り白雲に向かひて歸る
菱蔓弱難定　　菱蔓　弱くして定まり難く
楊花輕易飛　　楊花　輕くして飛び易し
東皐春草色　　東皐　春草の色
惆悵掩柴扉　　惆悵として柴扉を掩ふ

（『王右丞文集』[1]巻四）

この詩で王維は、渓谷の入り口には閒遠な鐘の音が響き、漁師や樵夫も姿を見なくなる中、はるか遠くにたたずむ遠山の夕暮れを眺めつつ、獨り白雲が浮かぶ輞川荘を目指して歸って行く。菱の蔓は卑弱で留まり難く、柳絮は輕やかに浮遊する。東の岡には春草が青々と茂り、「惆悵」として柴の扉を閉じると詠じるが、安息の場である輞川荘に辿り着いたにも拘わらず、王維はなぜ「惆悵」と詠じたのだろうか。

尾聯についての從來の解釋には、例えば都留春雄氏[2]は「東の岡の春の草のたたずまいに、ふとある哀しみを感じ、柴の扉を閉じる」（傍點筆者、以下同じ）とし、西岡晴彦氏[3]は「東の岡にいっせいに生えだした若草の緑に、私はふとものがなしさにおそわれて、我が家の柴の扉を閉ざしたのだ」とするが[4]、王維の「哀しみ」や「ものがなしさ」の原因は一體何か。「惆悵」とは、王維のどのような心情を表現するのであろうか。從來の解釋では、なお明確な解答が得られないように思われる。

王維は輞川荘において、「輞川集二十首」を詠じるなどの文藝活動を行っていた。先行研究では、官界で不遇な立場に置かれた王維は、輞川の山水に遊び隱逸を志向することによって、その苦悶を解放したとされる。しかし、輞川荘で詠じられた詩には、別荘での安息の生活を享受する一方、この「歸輞川作」詩の「惆悵」の如く、獨り悲しげな心情を吐露する詩句も屢々みられるのである。[5]

本稿では、王維が輞川莊で「惆悵」と詠じた作品に注目し、その「惆悵」に王維の如何なる心情が表出されているのかを探り、王維が輞川莊において、どのような文學活動を行ったかを改めて問い直したい。

## 一　王維詩の「惆悵」とその語義

王維が輞川莊で「惆悵」と詠じた詩は、冒頭に擧げた「歸輞川作」詩の他にも以下のような作品がある。

別輞川別業　輞川別業に別る

依遲動車馬　依遲として車馬を動かし
惆悵出松蘿　惆悵として松蘿を出づ
忍別青山去　忍んで青山に別れて去るとも
其如淥水何　其れ淥水を如何せん

（『王右丞文集』卷五）

この詩で王維は、のろのろと馬車を進め、「惆悵」として松蘿（かづら）の茂る輞川の山林を後にし、たとえ緑茂る山々との別れに堪え得ても、青く澄んだ輞水との別れをどうしたものかと、去り難い思いに驅られている。「別輞川別業」詩は、輞川莊から立ち去り難い心情を「惆悵」と詠じるが、さきに擧げた「歸輞川作」詩は安息の場である輞川莊に歸り着いて、「惆悵」と詠じたのである。次に、

春中田園作　春中田園の作

屋上春鳩鳴　屋上に春鳩鳴き
村邊杏花白　村邊に杏花白し
持斧伐遠揚　斧を持して遠揚を伐（き）り
荷鋤覘泉脈　鋤を荷（にな）ひて泉脈を覘（うかが）ふ
新燕識舊巢　新燕　舊巢を識り
舊人看新曆　舊人　新曆を看る
臨觴忽不御　觴に臨みて忽ち御せず
惆悵遠行客　惆悵たり　遠行の客

（『王右丞文集』卷四）

この詩には、屋上で鳴く鳩、村に咲く杏花、斧で枝を切り、鋤を擔い水脈を探す人々を描き、燕が古巢に戻り、新春を迎えた輞川莊ののどかな光景が詠じられている。そして、この光景を眺めながら王維は、酒を飲もうとした手をはたと止め、遠く異鄕に在って戻らない友人を思い、「惆悵」するのである。[6] さらに、「華子岡」詩では、

華子岡　華子岡

飛鳥去不窮　飛鳥　去りて窮まらず
連山復秋色　連山　復た秋色
上下華子岡　華子岡を上下すれば
惆悵情何極　惆悵として　情何ぞ極まらん

（『王右丞文集』卷四）

と詠み、陶淵明「飲酒二十首」其五の「山氣日夕佳、飛鳥相與還（山氣　日夕に佳し、飛鳥　相與に還る）」を踏まえ、果てしなく廣がる空を鳥はどこまでも飛び續け、連なる山々が秋の氣配となった光景を眺めて、「惆悵」して思いは盡きないと詠じる。[7]

以上、輞川莊において「惆悵」と詠じられた詩を擧げたが、就中「歸輞川作」詩は輞川莊に歸り着いて「惆悵」し、「別輞川別業」詩は輞川莊を立ち去る際に「惆悵」と詠じるが、これらの「惆悵」には、一體王維の如何なる心情が表現されているのだろうか。

そもそも雙聲語である「惆悵」とは、どのようなニュアンスを傳え

る言葉であったのか。まず、このことを歴史的に辿っておきたい。

「惆悵」の最も早い用例に、宋玉「九辯」がある。

廓落兮羈旅而無友生　廓落として羈旅して友生無く
惆悵兮而私自憐　惆悵として私かに自ら憐れむ
（『文選』巻三三）

この「惆悵」は、旅先で友人もいない孤獨の寂しさを詠じている。

續いて、後漢・張衡「四愁詩四首」其二には、

路遠莫致倚惆悵　路遠くして致す莫く　倚りて惆悵たり
何爲懷憂心煩傷　何爲(なんす)れぞ憂ひを懷きて心煩傷する
（『文選』巻二九）

と、遠く離れた戀人に會えない寂しさを表現する。また、南朝宋・鮑照の「舞鶴賦」には、

歲崢嶸而愁暮　歲崢嶸として暮るるを愁へ
心惆悵而哀離　心惆悵として離るるを哀しむ
……　……
（中略）
仰天居之崇絕　天居の崇絕を仰ぎ
更惆悵以驚思　更に惆悵として以て驚思す
（『文選』巻十四）

とあり、仲間とはぐれた悲しみや天の住まいへ戻ることができない辛さを表現する。これらの「惆悵」は友人や戀人に會えない寂しさ、故郷へ歸れない悲しみなどを表す。また、後漢末・陳琳の詩に、

惆悵忘旋反　惆悵として旋反するを忘れ
歔欷涕霑襟　歔欷して涕　襟を霑(うるは)す
（『藝文類聚』巻二八　遊覽）

とあり、失意の念に込み上げる辛さを表現する。そして、南朝梁・蕭子雲の「贈海法師還甑山」詩には、

動予憶山思　予の憶山の思ひを動かし
惆悵惜荷巾　惆悵として荷巾を惜しむ
（『藝文類聚』巻三一　贈答）

と、山中に隱棲したことを思い起こし、切なさが滲み出ている。

これらの用例から、「惆悵」は、心中に沸き起こる寂しさや切なさ、胸を締め付ける失意の辛さなどが、悲哀を伴って込み上げる心情を表現すると考えられる。

では、王維が輞川莊で「惆悵」と詠じた詩の他に、どのように詠じているかを併せて檢討したい。

①平蕪綠兮千里　平蕪綠なること千里
眇惆悵兮思君　眇(はるか)に惆悵として君を思ふ
（「送友人歸山歌二首」其二『王右丞文集』巻一）

②惆悵新豐樹　惆悵たり　新豐の樹
空餘天際禽　空しく餘す　天際の禽
（「送從弟蕃遊淮南」『王右丞文集』巻五）

③企予悲送遠　企(つまだ)ちて　遠きを送るを悲しみ
惆悵睢陽路　惆悵たり　睢陽の路
（「送魏郡李太守赴任」『王右丞文集』巻五）

④送君盡惆悵　君を送りて盡く惆悵たり
復送何人歸　復た何人の歸るを送らん
（「送張五歸山」『王右丞文集』巻五）

⑤惆悵極浦外　惆悵たり　極浦の外
迢遞孤煙出　迢遞として孤煙出づ
（「和使君五郎西樓望遠思歸」『王右丞文集』巻二）

⑥歸歟紲微官[8]　歸らんかな　微官を紲(しりぞ)けん
惆悵心自咎　惆悵として心自ら咎む
（「晦日遊大理韋卿城南別業四首」其二『王右丞文集』巻五）

⑦惆悵故山雲　惆悵たり　故山の雲
徘徊空日夕　徘徊して空しく日夕
（「歎白髮二首」其二『王右丞文集』巻六）

①と④の詩は友人との別れに寂しさが募り、②と③の詩は遠方に去る従弟や友人を見送り、獨り取り殘された寂しさを詠じている。⑤の詩は左遷地の濟州（山東省茌平縣西南）より故郷を思って込み上げる切なさを詠じる。そして、⑥と⑦の詩は歸隱できない不甲斐なさや焦りを滲ませている。これらの例には、友人や従弟を見送る寂しさ、望郷の念、失意の念などに込み上げる切なさ、胸を締め付ける不甲斐なさなどが「惆悵」と表現され、王維詩以前の用例と同様に、寂しさや切なさが悲哀を伴って込み上げる心情を表現することが判る。

一方、これまでの「惆悵」とは異なり、樂舞などの藝術の素晴らしさを表現したと考えられる用例も見受けられる。例えば、

其始興也　其の始めて興るや
若俯若仰　俯すが若く仰ぐが若く
若來若往　來るが若く往くが若し
雍容惆悵　雍容惆悵として
不可爲象　象(かたち)を爲す可からず
（傅毅「舞賦」『文選』巻十七）

罔浪孟以惆悵　罔浪孟として以て惆悵たり
若欲絕而復肆　絕えんと欲して復た肆(つら)なるが若し
（潘岳「笙賦」『文選』巻十八）

惆悵清管　惆悵たる清管
徘徊輕俏　輕俏に徘徊す
（謝朓「侍宴華光殿曲水奉敕爲皇太子作」其七『謝宣城詩集』[9]巻一）

これらの「惆悵」は、舞の姿、笙や管の音色などを形容しており、優れた藝術の美しさを表現したものであろう。

では、王維が輞川莊で詠じた「惆悵」には如何なる心情が表出されているのだろうか。「別輞川別業」詩は、王維が輞川莊を離れ長安へ戻ることをためらい、離れ難い思いに胸を締め付けられる心情を表したと解することが出來そうだが、安息の場である輞川莊に歸り、「歸輞川作」詩に「惆悵掩柴扉」と詠じた「惆悵」は、果たして悲哀を伴った寂しさや切なさが込み上げる心情を表現するのであろうか。或いは、作者の纖細な感性に基づく藝術的表現なのであろうか。以下に、「歸輞川作」詩の解釋を中心に考察を加えたい。

## 二　桃源鄉へと歸る隱者

本節では、主に「歸輞川作」詩の首聯及び頷聯の解釋について檢討を加えたい。該詩を再掲しておこう。

1谷口疎鐘動　漁樵稍欲稀
3悠然遠山暮　獨向白雲歸
5菱蔓弱難定　楊花輕易飛
7東皐春草色　惆悵掩柴扉

まず、初句の「谷口」について、明・顧起經『類箋唐王右丞詩集』巻四は、「亦暗用鄭子眞事（亦暗に鄭子眞の事を用ふ）」と注している。鄭子眞とは、揚雄『法言[10]』問神篇に、

谷口鄭子眞、不屈其志而耕乎巖石之下、名震於京師。

谷口の鄭子眞は、其の志を屈せずして巖石の下に耕し、名は京師に震ふ。

とあり、『漢書』巻七二・王貢兩龔鮑傳の序文によると、

成帝時、元舅大將軍王鳳以禮聘子眞、子眞遂不詘而終。

成帝の時、元舅の大將軍王鳳、禮を以て子眞を聘すも、子眞　遂に詘まずして終はる。

とあって、王鳳の招聘を拒み、「谷口」（陝西省醴泉縣東北）に隱棲した人物であることが判る。

また、輞川の地理について、『長安志』[11]巻十六に、

輞谷水、出南山輞谷、北流入霸水。

輞谷水は、南山の輞谷より出で、北のかた流れて霸水に入る。

とみえ、また輞川莊の所在について、

清源寺在縣南輞谷內。……維表乞施爲寺焉。

清源寺は（藍田）縣の南の輞谷の內に在り。……（王）維　表して施して寺と爲すを乞ふ。

と記されている。初句の「谷口」は、「輞谷」に構えた輞川莊への入り口であると同時に、王維は自らを鄭子眞に擬して表現しているのである。[12] つまり、隱者に扮した王維が、「輞谷水」に沿って輞川莊に向かうのである。

二句目の「漁樵」は王維の別の詩にも屢々登場する。例えば、

杏樹壇邊漁父　　杏樹壇邊の漁父
桃花源裏人家　　桃花源裏の人家

（「田園樂七首」其三『王右丞文集』巻四）

と、輞川莊を桃源鄉に擬え、孔子に眞理を說いた漁父が登場する。[13]

ところで、首聯の「谷口」や「漁樵」という詩語、そして「輞谷水」という地理環境から推せば、恰も陶淵明の「桃花源記」を再現するかのようである。「田園樂」詩においても、輞川莊を「桃花源」に擬していることがその傍證となる。

陶淵明の「桃花源記」では、武陵の漁人が桃林の美しさに惹かれて川を遡り、

林盡水源、便得一山。山有小口。髣髴若有光。便捨船從口入。林は水源に盡き、便ち一山を得たり。山に小口有り。髣髴として光有るが若し。便ち船を捨てて口より入る。

（淸・陶澍『靖節先生集』巻八）

ここで漁人は水源に行き着き、洞窟を發見して中へ入って行く。そして、王維が「桃花源記」を踏襲して詠じた「桃源行」[14]にも、

坐看紅樹不知遠　　坐ろに紅樹を看て遠きを知らず
行盡青溪不見人　　青溪を行き盡くして人を見ず
山口潛行始隈隩　　山口より潛行すれば始め隈隩
山開曠望旋平陸　　山開けて曠望すれば旋ち平陸

（『王右丞文集』巻一）

と述べ、「桃花源記」の漁人と同じく洞窟に潛入する。そして「歸輞川作」詩の首聯は、右の二作品を踏まえて、王維が武陵の漁人の如く「輞谷水」に沿って遡り、「輞谷」に入って行くことを表現するのである。

續いて、初句の「疎鐘動」は、王維の別の詩に、

寒燈坐高館　　寒燈　高館に坐し
秋雨聞疎鐘　　秋雨　疎鐘を聞く

（「黎拾遺昕裴迪見過秋夜對雨之作」『王右丞文集』巻四）

とあり、鐘の音を用いて夕刻の静寂を表現する。二句目の「漁樵稍欲稀」、及び三句目の「遠山暮」と共に、夕暮れの静まり返った様子を描いている。それと同時に、桃源郷に連なる表現でもある。「稍欲稀」とは、王維「桃源行」の「行盡青溪不見人」に相似し、「疎鐘動」は「藍田山石門精舍」詩に、

笑謝桃源人　笑ひて謝す　桃源の人に
花紅復來覿　花紅なれば復た來て覿んと

（『王右丞文集』巻三）

と詠じ、「石門精舍」（佛寺の名稱）を「桃源」に擬すことから、鐘の音も王維にとって桃源郷の一景物となっているのであろう。

このように、首聯は「桃花源記」、「桃源行」の構成を再現し、輞川荘を桃源郷に見立てている。鄭子眞に扮した王維が、「輞谷水」に沿って遡り、「輞谷」に構えた輞川荘へ入って行くのである。

そして、三句目の「悠然」は陶淵明「飲酒二十首」其五に、

采菊東籬下　菊を采る　東籬の下
悠然見南山　悠然として南山を見る

（『靖節先生集』巻三）

と、はるか遠くにたたずむ南山の姿が目に入ったことを詠じるが、[15]ここでも王維は陶淵明詩の詩語を用いて「遠山」を描寫している。

四句目の「白雲」は、輞川荘の象徴である。[16]「桃源行」でも、

峽裏誰知有人事　峽裏　誰か知らん　人事有るを
世中遙望空雲山　世中　遙かに望めば空だ雲山のみ

と、桃源郷は雲に覆われた場所であり、該句の「白雲」は、桃源郷の如き輞川荘を象徴するのである。してみれば、同じ四句目の「歸」には歸る、戻るの意だけでなく、歸隱、歸田の意を含むであろう。

首聯及び頷聯は、輞川荘を桃源郷に見立て、隱者の鄭子眞に扮した王維が、「輞谷水」に沿って「輞谷」へ入り、夕暮れの静寂の中、輞川荘に歸隱することを詠じているのである。

さて、首聯が「桃花源記」に擬され、三句目に「飲酒二十首」其五に詠じられた「悠然」の語を用いるが、結句の「掩柴扉」も、

長吟掩柴門　長吟して柴門を掩ひ
聊爲隴畝民　聊か隴畝の民と爲らん

（「癸卯歳始春懷古田舍二首」其二『靖節先生集』巻三）

とあるように、陶淵明の作品に屢々見られる常套表現である。このように、「歸輞川作」詩には、陶淵明詩に用いられた表現が一再ならず見受けられることから推せば、當該の詩は、實は陶淵明を念頭に置いて詠じられたのではないだろうか。そして、陶淵明が辭職し故郷に隱棲することを詠じた「歸去來兮辭」にも、「惆悵」が用いられているのである。そうであれば、「歸輞川作」詩の背景に、「歸去來兮辭」との關連を考えずにはおけないように思われる。次節に、兩作品の關係について考察したい。

## 三　官僚生活への失望

陶淵明は彭澤縣令就任後、まもなく官僚生活を見限り、早々に辭職して故郷に歸隱した。「歸去來兮辭」には次のようにある。[17]

歸去來兮　歸りなんいざ
田園將蕪胡不歸　田園將に蕪れなんとす　胡ぞ歸らざる
既自以心爲形役　既に自ら心を以て形の役と爲す
奚惆悵而獨悲　奚ぞ惆悵として獨り悲しまん
悟已往之不諫　已往の諫められざるを悟り

知來者之可追　　來者の追ふ可きを知る
寔迷途其未遠　　寔に途に迷ふこと其れ未だ遠からず
覺今是而昨非　　今の是にして昨の非なるを覺る

（『文選』巻四五）

「既自以心爲形役」とは序文によれば、「質性自然、非矯厲所得。……嘗從人事、皆口腹自役（質性は自然にして、矯厲して得る所に非ず。……嘗て人事に從ひしは、皆口腹に自ら役せらる）」（『靖節先生集』巻五）と、自身の氣性を押し殺し、生活のために仕官したことを言う。そして、官僚生活を「已往の諫められざる」ことであり、隱遁を「來者の追ふ可き」ことと述べ、辭職し隱遁することが正しい選擇であると詠じている。「歸去來兮辭」には引き續き、家族と再會し酒を飲み、我が家にくつろぐ生活を詠じ、

園日涉以成趣　　園は日びに涉つて趣を成し
門雖設而常關　　門は設くと雖も常に關ざす

と述べて、門を閉ざし、

歸去來兮　　歸りなんいざ
請息交以絕游　　請ふ　交はりを息め以て游を絕たん
世與我而相遺　　世と我とは相遺る
復駕言兮焉求　　復た駕して言に焉をか求めん

とあって、外界との接觸を斷ち、再び仕官しないことを述べる。

このように、官僚生活を見限り、故郷では外界と接觸を斷って隱遁生活に興じることから、「奚惆悵而獨悲」とは、陶淵明の官僚生活に對する幻滅や現實社會への失望を吐露した言葉であったと考えられる。そうであれば、最終段に陶淵明が、

已矣乎　　已んぬるかな
寓形宇內復幾時　　形を宇內に寓すること復た幾時ぞ
曷不委心任去留　　曷ぞ心を委ねて去留に任せざる
胡爲遑遑欲何之　　胡爲れぞ遑遑として何くに之かんと欲する

……　……

（中略）

登東皐以舒嘯　　東皐に登りて以て舒嘯し
臨清流而賦詩　　清流に臨みて詩を賦す
聊乘化以歸盡　　聊か化に乘じて以て盡くるに歸し
樂夫天命復奚疑　　夫の天命を樂しみて復た奚をか疑はん

と詠じて、短い人生をあくせく煩わず、成り行きに任せようと述べ、「東皐」に登って「舒嘯」し、「清流」に臨んで詩を詠じ、「天命」に身を委ねて生を樂しもうと詠じることは、官僚生活への失望から解放され、隱遁生活を享受する喜びとして理解できるであろう。

では、王維の「歸輞川作」詩は、どのように詠じているだろうか。

頸聯は水に漂う「菱蔓」と風に舞う「楊花」の對をなし、頷聯の「遠山」や「白雲」といった悠大な遠景に對して、近景の微弱な存在を詠じる對となっている。繪畫にも精通した王維の面目躍如たる風景描寫であるが、果たしてそれだけに止まるのであろうか。というのも、明・顧可久『唐王右丞詩集』巻四は、頸聯に「人事之比」という興味深い注を施し、該詩を「仕而不得意之作。含蓄不露（仕へて意を得ざるの作。含蓄露はならず）」と評するからである。顧可久の評注は何を示唆するのだろうか。その意圖を考察するために、顧可久が王維の「酌酒與裴迪」詩に付した評注を參照してみよう。

「酌酒與裴迪」詩は、裴迪に人情は寄せては返す波の如く、變わり易いものと說いた後、

白首相知猶按劒　　白首の相知も猶ほ劒を按じ

朱門先達笑彈冠　朱門の先達は彈冠を笑ふ
草色全經細雨濕　草色　全く細雨を經て濕ひ
花枝欲動春風寒　花枝　動かんと欲して春風寒し
（『王右丞文集』巻三）

この詩で王維は、心を許し合った者でなければ、年を重ねた友人でも劍の柄に手を掛けて爭い[18]、貴顯の出世した者が仕官の準備を整える者を嘲ると[19]、裴迪に人世の多難を說き聞かせ、草々は小雨に降られてしっとり潤い、枝の花が開こうとして、春風はなお冷たく吹きつけると詠じている。

顧可久は、「草色」の句に「比群小之驕（群小の驕れるに比す）」と注し、「花枝」の句に「比君子之晦（君子の晦きに比す）」と注する（『唐王右丞詩集』巻三）。「群小」は『詩經』邶風・柏舟に「憂心悄悄、慍于群小（憂心は悄悄として、群小に慍らる）」とあり、鄭箋に「群小、眾小人在君側者（群小は、眾くの小人の君側に在る者なり）」と言うことから、佞臣を指す。從って、「草色」の句は、佞臣が天子の恩澤を被ることと解し、「花枝」の句は、天子の不明を冷たく吹き付ける風に喩える、と解するようである。顧注に從うと、「草色」、「花枝」の聯は植物の描寫を用いて、佞臣が榮え、忠臣が不遇な立場に置かれることを隱喩することとなる[20]。

この顧注と「歸輞川作」詩の「仕而不得意之作」という詩評を考え併せると、頸聯に付された「人事之比」という注は仕官の喩えであることを意味し、官界に出仕するも不安定で弱い立場にあることを「菱蔓」、「楊花」の姿に喩えたものとなろう。「歸輞川作」詩の頸聯は植物の描寫を用いて、王維の官僚生活を比喩していると考えられる。

續いて、七句目の「東皐」は陶淵明の「歸去來兮辭」にも「登東皐以舒嘯」と詠じているが、潘岳「秋興賦」に、

且斂衽以歸來兮　且く衽を斂めて以て歸り來たり
忽投紱以高厲　忽ち紱を投じて以て高く厲らん
耕東皐之沃壤兮　東皐の沃壤を耕し
輸黍稷之餘稅　黍稷の餘稅を輸さん
（『文選』巻十三）

と、辭職し歸田する場所を表現している。

また、同じ七句目の「春草色」は、劉安「招隱士」に、

王孫遊兮不歸　王孫　遊びて歸らず
春草生兮萋萋　春草　生じて萋萋たり
（『文選』巻三三）

と見え、前野直彬氏「春草考」[21]では、この「春草」は時間の推移を暗示し、歸らぬ人への慕情をかき立てるイメージを持つと述べるが、王維詩の「春草」と「惆悵」の關係については、從來の「春草」のイメージからは說明が困難であり、「前に菱蔓・楊花の聯をおいて人の世のはかなさを詠嘆した氣分のあとでは、春草の色が美しければ美しいほど、惆悵の念は增さざるを得ない」とし、「詩人の特定の感情」であると解釋されている。同氏の見解によれば、「歸輞川作」詩の「惆悵」は、「菱蔓」、「楊花」に觸發され、美しく茂る「春草」によって、一層かき立てられていると考えられる。

そして、結句の「掩柴扉」は、世俗との隔絕を表現しており、王維の別の詩にも、

寂寞掩柴扉　寂寞として柴扉を掩ひ
蒼茫對落輝　蒼茫として落輝に對す
（「山居卽事」『王右丞文集』巻四）

山中相送罷　山中　相送りて罷み
日暮掩柴扉　日暮　柴扉を掩ふ

（「送別」『王右丞文集』巻五）

など、俗世と隔たった輞川荘に身を置くことを詠じている。

「歸輞川作」詩では、王維が隠者の鄭子眞に扮装して桃源郷に入り、歸隠を試みるが、「菱蔓」、「楊花」の姿に、自身が不安定で弱々しい立場に置かれた官僚であることを思い起こし、そして「東皐」に生い茂る「春草」を目にして、俗世と隔たった輞川荘の「柴扉」を閉じるとき、「惆悵」と詠じたのであった。

これに對して、「歸去來兮辭」は官僚生活に「惆悵」し、故郷では隠遁生活を樂しんでいる。この點が兩作品の最も大きな相違であり、この相違を生じた原因は、陶淵明は官を棄てて隠棲したが、王維はたとえ隠者に扮装しても、一方で官僚生活を續けたことにある。

してみれば、王維が輞川荘で「惆悵」と詠じた理由は、實は陶淵明の如く、官僚生活に失望していたからであると考えられるだろう。

## 四　悲運の官途

王維が輞川荘で「惆悵」と詠じた背景には、官僚生活に對する失望があったと考えられるが、では具體的に當時官界で一體何が起こっていたのであろうか。以下に、王維が輞川荘を經營した天寶から乾元にかけての官界情勢を檢討しよう。

天寶の官界について、陳貽焮、入谷仙介兩氏は、李林甫、楊國忠が專横する官界は、決して平穏な場所ではなく、王維は李・楊との距離を保ちつつ政治上の衝突を避け、苦心する立場にあったと述べる。[22] そのことを如實に示すのが、「和僕射晉公扈從溫湯」詩である。詩題の「僕射晉公」とは左僕射を拜任し、晉國公に封じられた李林甫を指しており、該詩の十五句目以降に次のようにある。

謀猷歸哲匠　謀猷は哲匠に歸し
詞賦屬文宗　詞賦は文宗に屬す
司諫方無闕　諫を司るも方に闕くる無く
陳詩且未工　詩を陳ぶるも且つ未だ工ならず
長吟吉甫頌　吉甫の頌を長吟し
朝夕仰清風　朝夕に清風を仰がん

（『王右丞文集』巻二）

ここに言う「哲匠」、「文宗」は李林甫を指し、國策や詩文の巧みさを讃える。「司諫」は左補闕であった王維を指し、國政の補うべきも無く、自身の詩の不出來を述べる。そして、李林甫の詩を尹吉甫が周の宣王を讃えた「烝民」（『詩經』大雅）に喩え、その詩を稱讃する。李林甫專權下の官界における王維の立場を象徴する詩である。[23]

さらに、清・徐松『唐兩京城坊考』[24]巻三・平康坊の條に、李林甫邸の一部であった嘉猷觀の精思院に、王維畫があったと記す。[25]『資治通鑑』によれば、天寶九載（七五〇）十月に、李林甫らが邸宅を喜捨し道觀とすることを願い出ている。[26] そして、李林甫は天寶十一載（七五二）十一月に死去するが、この間の王維は、天寶九載に亡母の喪に服し、同十一載に吏部郎中として復官している。だとすれば、王維が精思院に畫を描いたのは天寶十一載である可能性が高く、吏部郎中復官に際し、當時吏部尚書を兼任していた李林甫と接觸があったことが推測される。

また、天寶の官界における自身の立場について、

自顧無長策　自ら顧みるに長策無く

空知返舊林　空しく知る　舊林に返るを
既寡遂性歡　既に性を遂ぐるの歡び寡なく
恐招負時累　恐らくは時に負くの累ひを招かん
（「贈從弟司庫員外絿」『王右丞文集』巻三）

とあり、王維が李・楊らの政治に失望し、自己の無力感を抱いていたことが窺え、決して安穏たる官僚生活ではなかったと考えられる。

李林甫の死後、楊氏一族が繁榮を極めたが、安祿山の叛亂により唐朝は崩壞の危機を迎え、楊氏一族は滅び、王維は賊軍の捕虜となった。亂後、王維は捕虜となった罪を許されるが、その理由について、『舊唐書』巻一九〇・王維傳は、

維以凝碧詩聞于行在、肅宗嘉之。會縉請削己刑部侍郎以贖兄罪、特宥之、責授太子中允。

維は凝碧詩を以て行在に聞こえ、肅宗　之を嘉す。會たま縉　己の刑部侍郎を削り以て兄の罪を贖はんことを請ひ、特に之を宥し、太子中允を責授す。

と、「凝碧詩」が肅宗に嘉せられ、弟王縉の贖罪により許されたとする。[27] しかしながら、免罪の理由はこの二點に止まらないようである。唐・薛用弱『集異記』「王維」[28]に、

天寶末、祿山初陷西京、維及鄭虔、張通等、皆處賊庭。洎尅復、俱囚於宣楊里楊國忠舊宅。崔圓因召於私第、令畫數壁。當時皆以圓勳貴無二、望其救解。故運思精巧、頗絕其能。

天寶末、祿山　初めて西京を陷れしとき、維及び鄭虔、張通等、皆賊庭に處る。尅復するに洎び、俱に宣楊里の楊國忠舊宅に囚はる。崔圓　因りて私第に召し、數壁に畫かしむ。當時皆圓の勳貴無二なるを以て、其の救解を望む。故に運思精巧にして、頗る其の能を絕くす。

と、王維、鄭虔らが崔圓の邸に繪を描き、救いを求めたことを記す。この點について、谷口明夫氏[29]は、「王維が、鄭虔、張通らと共に、時の權力者崔圓の爲に壁畫を描き、その救解を望んだ。つまり、自分の助命運動を行った」と指摘する。王維の免罪には崔圓の關與があったと考えられるが、では崔圓とは一體何者だろうか。[30]『舊唐書』巻一〇八・崔圓傳によると、

宰臣楊國忠遙制劍南節度使、引圓佐理、乃奏授尚書郎、兼蜀郡大都督府左司馬、知節度留後。

宰臣楊國忠　劍南節度使を遙制し、圓を引きて佐理せしめ、乃ち奏して尚書郎を授け、蜀郡大都督府左司馬を兼ね、節度留後を知せしむ。

とあることから、崔圓は楊國忠に取り立てられた人物であったと判る。そして崔圓は安史の亂中、玄宗により中書侍郎、同中書門下平章事に任命され、その後肅宗朝において、中書令を拜し趙國公に封じられたが、『新唐書』巻一三九・房琯傳には、

圓以金畀李輔國、不淹日被寵。

（崔）圓　金を以て李輔國に畀へ、淹日ならずして寵を被る。

とあり、肅宗の宦官李輔國に賄賂を贈り取り入ったことが判る。崔圓はその功績により宰相の地位に就いたが、實は楊國忠や李輔國ら奸臣と結託した人物でもあった。そして、王維は崔圓に「救解を望」んだのであり、ここには保身を圖る悲運の官人の姿が現れている。

そして亂後、王維は肅宗朝に復官するが、肅宗朝では已に宦官の李輔國が實權を握り、玄宗の舊臣は排斥の對象であった。[31] 官界では、李

輔國ら新興勢力と玄宗舊臣の熾烈な政治闘爭が繰り廣げられ、王維と交遊があった賈至や杜甫、房琯、嚴武ら玄宗の舊臣は、次々に朝廷を追われてしまう。そして、そのような情勢の中、王維は輞川莊を手放したのである。肅宗朝では、李林甫、楊國忠ら專權下の天寶の官界と同じことが繰り返されたが、王維ら玄宗の舊臣にとって、李輔國ら新興勢力は一層脅威であったに違いない。

さらに、王維が輞川莊を手放すことに關連して、當時、莊園經營に關わる問題も存在したようである。

王維は、睿宗、玄宗に仕えた韓朝宗の墓誌銘を記しているが、その墓誌銘によれば、韓朝宗は嘗て終南山に莊園を經營し、それが原因で左遷されている。陳鐵民氏[32]は、該事件に李林甫が關與したとする。王維の「唐故京兆尹長山公韓府君墓誌銘并序」に、

頃坐營谷口別業、貶高平太守。又坐長安令有罪、貶吳興郡別駕。諸葛田園、未啓明主。華陰傾巧、卒敗名儒。

頃　谷口の別業を營むに坐し、高平太守に貶せらる。又た長安令の有罪に坐し、吳興郡別駕に貶せらる。諸葛の田園、未だ明主に啓さず。華陰の傾巧、卒に名儒を敗る。

（宋蜀刻本『王摩詰文集』[33]卷八）

と、韓朝宗が高平太守、さらには吳興別駕に左遷されたことを記す。このことは、『舊唐書』卷一〇五・王鉷傳を參照すると、

三載、長安令柳升以賄敗。初、韓朝宗爲京兆尹、引升爲京令。朝宗又于終南山下爲苟家觜買山居、欲以避世亂。玄宗怒、敕鉷推之、朝宗自高平太守貶爲吳興別駕。

（天寶）三載、長安令柳升　賄を以て敗る。初め、韓朝宗　京兆尹爲りしとき、升を引きて京令と爲す。朝宗　又た終南山下に苟家觜を爲め山居を買ひ、以て世亂を避けんと欲す。玄宗　怒り、鉷に敕して之を推べしめ、朝宗　高平太守より貶せられて吳興別駕と爲る。

とあって、韓朝宗が部下の收賄罪に連座し、莊園經營が原因で左遷されたことが判る。墓誌銘には續けて、諸葛亮が私服を肥やさなかったことを上奏した故事[34]を用いて、韓朝宗が莊園のことを玄宗に上奏していなかった事を述べ、漢代に華陰縣に隱棲した張楷が冤罪で投獄された故事[35]を用いて、韓朝宗が陷穽に落ちたことを述べる。さらに、王鉷は李林甫の部下であったことから、この事件にも李林甫の謀略が働いた公算が大きい[36]。この事件から莊園には財產價値が認められ、政治闘爭の口實になることが判る。この事件は、輞川莊を桃源鄉の如く築いた王維にとって、看過できない醜行であり、後に輞川莊を手放すことを促した原因の一つであったと考えられる[37]。

天寶から乾元にかけての官界は、李林甫や楊國忠、宦官李輔國ら奸臣が跋扈し、一時の安息も許されない情勢であった。また、安史の亂中、自らは賊軍の捕虜となってしまう。このように、王維は時代のうねりに翻弄される悲運の官途を辿ったのである。そして、李林甫や崔圓の邸に畫を描いたように、その藝術的才能も權力者に利用され、時に保身を圖る手段ともなった。さらに、最後には輞川莊を手放すに至ったのである。このように王維個人の事情にも、非力な一官僚の不運が明白に反映されている。これらの事情を鑑みれば、王維は輞川莊に歸っても、「菱蔓」、「楊花」の姿に弱く不安定な官僚である自身を重ね合わせては、心から安息することは出來ず、さらに自身の心情とは無關係に青々と美しく生い茂る「春草」を目にして、込み上げてくる悲哀を「惆悵」と表現したことは充分考えられるだろう。そして、その哀

しみの原因は、陶淵明の如く現實社會への失望であったと考えられる。

## 五　王維の憂愁

「歸輞川作」詩は、輞川莊を桃源郷に擬し、隱者の鄭子眞に扮した王維が、輞川莊に歸隱しようとすることを詠じた作品であった。しかし、「菱蔓」、「楊花」の「弱くして定まり難」く、「輕くして飛び易」い姿を目にした時、不安定で弱々しい存在である自身を重ねていたのであろう。そして「柴扉を掩」って、世俗と隔たった輞川莊に身を置きながらも、現實社會への失望を抱き、込み上げる悲哀を「惆悵」と詠じたのであった。また、「別輞川別業」詩においても、隱棲生活を樂しんだ輞川莊を離れ、自身が失望を抱く現實社會へと戻る時、輞川莊を去り難い思いに胸が締め付けられ、「惆悵」と詠じたのであった。

輞川莊での文學活動は、その背景に、王維の現實社會への深刻な失望を伴っていた。王維は、桃源郷の如き輞川莊に安息を求めたが、現實の官界では李林甫や楊國忠、李輔國ら奸臣が跋扈し、いつ朝廷から彈き出されるとも知れない不安定な立場に置かれていた。さらに、安史の亂に賊軍の捕虜となる悲劇に見舞われたように、時勢に翻弄されたのであった。また、王維個人の事情において、詩や畫のような藝術的才能でさえ權力者に利用され、保身を圖る手段となり、さらには安息の場であった輞川莊をも手放してしまうように、非力な官僚の姿が看取できるのである。

陶淵明は官僚生活に失望して「惆悵」し、官を棄て隱棲を樂しんだが、王維は官僚であり續けたために、輞川莊という安息の場に歸っても時として「惆悵」の思いに沈んだ。そして、その「惆悵」の背景には、世情の荒波に揉まれ、悲運の官途を辿った王維の、現實社會への深い失望が存していたのである。

このことは、王維や陶淵明のみの問題に止まらず、官人と隱逸の關係を探る上でも、大きな問題を含んでいるように思われる。

注

(1)　王維の詩文の引用は、靜嘉堂文庫藏宋本『王右丞文集』(汲古書院、二〇〇五年影印、米山寅太郎解題)を底本とし、適宜諸本を參看した。

(2)　都留春雄『王維』(中國詩人選集第六卷、岩波書店、一九五八年)一二三頁。

(3)　前野直彬編『唐詩鑑賞辭典』(東京堂出版、一九七〇年)三六〇頁。

(4)　この他、小林太市郎・原田憲雄共著『王維』(漢詩大系第十卷、集英社、一九六四年)二七九頁は、「東の皐(おか)べの春草の色をいたみながら、うなだれて紫(ママ)の扉をとじるのだ」とし、小川環樹・入谷仙介・都留春雄共著『王維詩集』(岩波書店、一九七二年)一二九頁は、「東の水邊、春の草のたたずまいは、うら悲しくて雲のかかる扉をとざす」(該書は明・顧起經『類箋唐王右丞詩集』を底本とし、「柴扉」を「雲扉」と作るのに從う)とする。石川忠久『漢詩をよむ　王維一〇〇選』(日本放送出版協會、二〇〇七年)九八頁は「東の丘に春の草が一面に生えている。もの悲しい氣持で、柴の扉をしめたことだ」とする。中國の注釋書で「歸輞川作」詩の「惆悵」に語注を付した書籍は、管見の限り見當たらない。なお、楊文生『王維詩集箋注』(四川人民出版社、二〇〇三年)は、次に述べる「春中田園作」詩、「華子岡」詩、「別輞川別業」詩の「惆悵」に「失意傷感」、「因失望而懊喪貌」などと注する。

(5)　王維の詩文の作品繫年は、陳鐵民『王維集校注』(中華書局、一九九七年)、及び同氏「王維年譜」(『王維新論』北京師範學院出版社、一九九〇年所收)を參照。

(6) 都留春雄『王維』一一六頁は「かなしいかな、はるかなる旅の友を想えば」とし、陳鐵民『王維集校注』四四九頁は「對着酒杯忽又不飲、我爲遠行客而惆悵。此處作者觸景生情、由春燕的回歸故巢、聯想到那些遠行在外的人、尙未得還鄉」と解するが、楊文生『王維詩集箋注』二八九頁は、開元十六年（七二八）、王維が淇水に隱棲中の作とし、「自謂因眷戀故土而失意傷感。或釋爲想到在外的遠行人不禁惆悵、存參」と注する。ここでは都留春雄、陳鐵民兩氏の說に從う。

(7) 「華子岡」詩の「惆悵」の意を佛敎思想から解釋するものに、陳允吉「王維輞川《華子岡》詩與佛家〈飛鳥喩〉」（『文學遺產』一九九八年、第二期）がある。

(8) 底本は「歸轍繼微官」に作る。宋蜀刻本『王摩詰文集』（上海古籍出版社、一九九四年）卷九に從う。

(9) 『四部叢刊』初編所收、明鈔本による。

(10) 『叢書集成』初編所收、漢魏叢書本による。

(11) 『宋元地方志叢書』（大化書局、一九八〇年）所收、淸・乾隆五二年刊經訓堂叢書本による。

(12) この他にも、王維自らを鄭子眞に擬す例に、「戲贈張五弟諲三首」其三（『王右丞文集』卷三）に「何事須夫子　邀予谷口眞」とある。

(13) 『莊子』雜篇・漁父篇。

(14) 唐代における「桃花源記」の受容について、松本肇「唐詩に見る桃花源—非充足の快樂—」（『日本中國學會報』第五四集、二〇〇二年）を參照。

(15) 「悠然」の解釋については、井上一之「『悠然見南山』考」（『中國詩文論叢』第九集、一九九〇年）を參照。

(16) 王維詩にみえる「白雲」について、鈴木修次『唐代詩人論』上卷「王維論」（鳳出版、一九七三年）二三七～二四一頁、都留春雄「王維詩に詠ぜられた『白雲』について」（『滋賀大國文』第十一號、一九七四年）等參照。

(17) 「歸去來兮辭」の解釋について、岡村繁『陶淵明　世俗と超俗』（日本放送出版協會、一九七四年）、石川忠久「歸去來の辭　隱者のうた」（伊藤漱平編『中國の古典文學—作品選讀—』東京大學出版會、一九八一年所收）、田部井文雄・上田武共著『陶淵明集全釋』（明治書院、二〇〇一年）等參照。

(18) 『史記』卷八三・鄒陽傳參照。鄒陽が梁の孝王に囚われ、獄中より奉った書を踏まえる。就中、書中の「有白頭如新、傾蓋如故」に據る。

(19) 「先達」は『韓非子』說林篇下の「管仲・鮑叔相謂曰、君亂甚矣、必失國。齊國之諸公子、其可輔者、非公子糾則小白也。與子人事一人焉、先達者相收」に基づく。「彈冠」は『漢書』卷七二・王吉傳の「吉與貢禹爲友、世稱『王陽在位、貢公彈冠』、言其取舍同也」に基づく。

(20) 淸・趙殿成『王右丞集箋注』（上海古籍出版社、一九九八年）卷十に、「成按、草色一聯、乃是卽景托諭。以眾卉而邀時雨之滋、以奇英而受春寒之痼。卽植物一類、且有不得其平者。況世事浮雲變幻、又安足問耶。擬之六義、可比可興」と、やはり植物の描寫を用いて世俗を喩えるとする。

(21) 前野直彬「春草考」（中國文學の會『中國文學研究』第二號、一九六一年）參照。

(22) 陳貽焮「王維的政治生活和他的思想」（『唐詩論叢』湖南人民出版社、一九八〇年所收）、入谷仙介『王維研究』「第八章　王維の不遇感」參照。この他、陳鐵民「從王維的交游看他的志趣和政治態度」、「談王維的隱逸」（共に『王維新論』所收）などがある。

(23) 伊藤正文『審美詩人　王維』（集英社、一九八三年）十七～十八頁、一八三～一八六頁は、該詩は李林甫に阿諛追從したとする。入谷仙介『王維研究』二八八～二九一頁、陳鐵民「從王維的交游看他的志趣和政治態度」七六～七八頁、張福慶「關於王維〈趨附〉李林甫一說的考辨」

（『華東師範大學學報』哲學社會科學版、一九九九年、第四期）等は、王維の立場上やむを得ないこととする。筆者は後者に贊同するが、王維と李林甫の關係を示す興味深い作品である。

(24) 中華書局、一九八五年。

(25) 伊藤正文『審美詩人　王維』一八二頁は「王維が時の權力者李林甫に接近した證として、李邸に壁畫を描いた」とする。

(26) 『資治通鑑』卷二一六・唐紀三二・玄宗天寶九載十月の條に「太白山人王玄翼上言見玄元皇帝、言寶仙洞有妙寶眞符。命刑部尚書張均等往求、得之。時上尊道敎、慕長生、故所在爭言符瑞、群臣表賀無虛月。李林甫等皆請捨宅爲觀以祝聖壽、上悅」とある。

(27) 「凝碧詩」は、「菩提寺禁、裴迪來相看説。逆賊等、凝碧池上作音樂、供奉人等、擧聲便一時淚下。私成口號、誦示裴迪」詩（『王右丞文集』卷六）を指す。また、王縉の贖罪について、「責躬薦弟表」（『王右丞文集』卷七）に「臣頃負累、繫在三司。縉上表祈哀、請代臣罪。臣之於縉、一無優憐。臣義不如弟」と記す。

(28) 『太平廣記』（中華書局、一九六一年）卷一七九所引。

(29) 谷口明夫「王維傳研究―正史撰者の記述姿勢について―」（廣島大學中國中世文學研究會『中國中世文學研究』第十二號、一九七七年）二〇頁參照。

(30) 崔圓と王維の關係について、王達津「王維的生平和詩」（『唐詩叢考』上海古籍出版社、一九八六年所收）一二八頁、天寶十一載の條は、「同崔員外秋宵寓直」詩（『王右丞文集』卷二）の崔員外を崔圓とするが、陳鐵民「讀張著《王維年譜》札記」（『文獻』一九九一年、第三期）は崔圓に斷定できないとし、陶敏『全唐詩人名彙考』（遼海出版社、二〇〇六年）一七一頁は崔國輔とする。なお確證を缺く。

(31) 拙稿「王維の輞川莊『喜捨』と宦官李輔國の專横」（『中國文學論集』第三五號、二〇〇六年）において、輞川莊を手放すことの政治的要因を考察し、王維は輞川莊を手放すことにより、政治鬪爭と一線を畫したことを論じた。

(32) 陳鐵民「從王維的交游看他的志趣和政治態度」九〇～九一頁參照。

(33) 底本は卷十の中で二箇所に斷片的に載錄し、不完全であるため、蜀刻本を用いた。

(34) 『三國志』卷三五・諸葛亮傳に「初、亮自表後主曰、成都有桑八百株、薄田十五頃、子弟衣食、自有餘饒。至於臣在外任、無別調度、隨身衣食、悉仰於官、不別治生、以長尺寸。若臣死之日、不使內有餘帛、外有贏財、以負陛下。及卒、如其所言」とある。

(35) 『後漢書』卷三六・張楷傳に「隱居弘農山中、學者隨之、所居成市、後華陰山南遂有公超市」、また「性好道術、能作五里霧。時關西人裴優亦能爲三里霧、自以不如楷、從學之、楷避不肯見。桓帝卽位、優遂行霧作賊、事覺被考、引楷言從學術、楷坐繫廷尉詔獄」とある。

(36) 『舊唐書』卷一〇五・王鉷傳に「時右相李林甫怙權用事、志謀不利於東儲、以除不附己者、而鉷有吏幹、倚之轉深、以爲己用」とある。また、『舊唐書』卷九九・李適之傳に「隴右節度皇甫惟明、刑部尚書韋堅、戶部尚書裴寬、京兆尹韓朝宗、悉與適之善、林甫皆中傷之、構成其罪、相繼放逐。適之懼不自安、求爲散職」とあり、韓朝宗、李適之らは皆、李林甫の陷穽に落ちたことが判る。

(37) 莊園や邸宅を手放し、寺院や道觀とすることに政治的要因が絡む事例に、例えば盛唐の王鉷、王銲兄弟の事件がある。『舊唐書』卷一〇五「王鉷傳」、『資治通鑑』卷二一六・唐紀三二・玄宗天寶十一載（七五二）三月、四月の條及び常袞「御史大夫王公墓誌銘」（『文苑英華』〔中華書局、一九六六年〕卷九四二）によると、弟王銲は邢縡と共に李林甫、楊國忠ら討伐を企て、反逆罪に問われている。兄王鉷はこの事件に連座し、一度は玄宗に罪を許されるが、楊國忠の謀略により自盡を賜った。この時、王鉷は「請捨宅爲觀表」（『全唐文新編』〔吉林文史出版社、二〇〇〇

年）巻三四(六)を上奏して安樂坊の邸宅を捨てて道觀とし、玄宗への報恩を述べるが、その背景には政治的要因があった。